愉しき院外交流

札幌市医師会
勤医協中央病院
林　浩三

臨床医は日々の診療の中で、必然的に、患者やその関係者など不特定多数の人々との接点を持つこととなる。小生も、「診療」という日常業務を通して、これまで何千何万といった人と対面し、言葉を交わすことを繰り返してきた。そのほとんどはビジネスライクな距離感を保ったドライな関係に終始しているが、意思を交わし合うことの多い医業の特殊性に加え、人間同士の関りである以上、「医療者と患者」の垣根を超えた付き合いに発展することも時としてあるものだ。過去を振り返って数えるに何人もの方々（患者さん）とプライベートなお付き合いに発展したことがあったので、いくつか紹介してみたい。

ある80代の方は、亡夫が残した畑の世話が大変だと診察室で吐露されたため、単身赴任中だった自由さもあり、休日に収穫の手伝いにお伺いした。学生時代、親戚の農家の繁忙期には、毎年のように駆り出されていたため、小生にとっては手慣れた作業であった。たいそうお役に立てたようで、農作業後にはお風呂と美味しい夕ご飯にも与かった。その患者さんとは今もメル友として遠距離ながら繋がっていて、田舎での一人暮らしの一助になればと、電子メール上ではあるが、たまに健康相談などにも乗っている。50代の方とは、趣味の薪ストーブで意気投合し、お宅に伺って立派な年代物の名器のメンテナンスの手伝いをしたこともあった。薪割りを愉しんだ後にストーブで焼いた手作りのピザに舌つづみを打ちながら、夜更けまで薪ストーブ談議に興じたのも懐かしい思い出である。お互いに阪神タイガースファンであった60代の方とは、交流戦でタイガース戦が開催される度に、日程調整をしては札幌ドームで落ち合い、一緒にトラ模様のメガホンを振りながら応援に興じたものであった。その患者さんとは、「いつか本場の甲子園で六甲おろしを合唱しよう」と約束していたが、ステージⅣの癌が急激に悪化し、残念ながら夢叶わぬまま鬼籍の人となってしまった。30代の若者とは、ロードバイクで美幌峠の15キロメートルにおよぶ険しい登りにアタックしたが、直近まで入院していた人とは思えない基礎体力を見せつけられ、着いてゆくのが精いっぱいだった。80代の元漁師の海釣りにつき合った際には、その老練な技の手ほどきを受けたのだが、小生の初心者然とした手つきをみて、「下手だなぁ！」「バッカヤロウ」などと罵声を頂戴する羽目にもなった。この時は、外科研修医時代の指導医の叱声がフラッシュバックしたが、当の太公望は、「指導に熱が入り過ぎたなあ」と屈託のない笑顔を返してきた。交流歴は他にも多々あるが、枚挙するに両手の指では足りないくらいである。

患者とのプライベートな付き合いについては賛否両論あるだろうが、病院という一種独特な空気を帯びた結界から一歩出て「市井（しせい）の人」としての付き合いをすることで、小生自身、多くの学びや気づきを経験できたと感じている。病気を抱えていることがそうさせるのか、皆さん、実に豊かで多種多様な個性を表現して見せてくれるものであった。「医師と患者」という傾斜がついた関係ではなく、同じ目線で、正面からがっぷり四つに組んで向かい合うと、自身の人生観や価値観の「ものさし」がいかに偏ったちっぽけなものかと思い知らされることも、一度や二度ではなかった。患者の背景にいる家族や友人の顔も良く見えるため、医療現場では、「病める人」「医療行為の客体」として片面的にしか見えていなかった患者の「人」としての認識が深まるもので、臨床に際して、自身の襟を正すきっかけにもなってきた。

つい先日のことであるが、NHKの番組に、以前担当した患者さん（ここでは仮にA氏としておく）が出演していた。以前、といっても20年近く前のことで、怪しい健康食品治療を思いとどまらせて手術をした経緯のある方だった。経年変化を認めたものの、その名前と容貌は間違いなくA氏であった。その方の職業を言ってしまうと、情報化社会の検索エンジンが簡単に個人を特定してしまうので、あえて伏せておくが、ある分野でとても著名な方であることを、このとき私は初めて知ることとなった。番組では、華やかな芸能人たちに囲まれて、その波乱万丈な人生が紹介されていたが、A氏を入院で診ていた頃の私は、その「小説より奇なり」を地で行くような人生の軌跡など何も知らず、医師としてのルーティンワークをこなしているに過ぎなかった。実は、番組の放映に先立ってA氏から小生の職場宛にお手紙を頂戴していたのだが、そこには「80歳を超えましたが、おかげさまで生かされています。先生にお会いしたいです…云々」との言葉がしたためられていた。A氏は現在、道外にお住まいである。「コロナ禍が一段落したら、お会いしましょう」と、返信の末尾に小生が書き添えたことは言うまでもない。